別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論 文 題 目　初期近代ドイツ語圏における旅行文化の成立
―― 1650－1820 年の旅行記を中心に ――

氏　　名　大林　侑平

論 文 内 容 の 要 旨

この論文では、初期近代に成立したドイツ語圏の旅行文化が二つの観点から考察される。一つは貴族的な規範に属す旅行者を巡る 18 世紀の一貫した言説、もう一つは旅行記というテクストの 18 世紀を通じ変化した叙述様式である。この二つの観点は旅行者という社会的カテゴリーに対応した規範の諸側面を捉えるものであり、ともに 1700 年ごろにツーリズムの広まりと共に旅行文化が成立したことを意味する。論文は二部構成であり、第一部では旅行文化の歴史叙述のための理論的枠組みを議論し、第二部では、第一部で提示した理論に準拠し、旅行者が現実の社交場面においては貴族的性格の伝統的規範を保ちつつも、この規範に即して旅行記における叙述様式や叙述内容を、先行する旅行記とは異なる新奇なものへ変化させてきた歴史的趨勢を明らかにした。

第一部では社会的カテゴリーの概念を歴史叙述の基礎的な単位として導入することを試み、人や物の移動、それから知識の移動に際して社会的カテゴリーが及ぼす影響に関して論じた。第一章では慣習や規範の歴史変化を文化的ニッチ構築の理論や文化的学習に基づいて理解するアプローチを検討し、ヒトの社会で慣習や規範が成立・変化する生物学的基盤や歴史的プロセスに社会的カテゴリーの概念が果たす役割の重要性について指摘した。

社会的カテゴリーは規範的な力を持ち、社会に属す独自の行為パターンを選好する一定数の集団に対応し、第二部で論じるように旅行者たちが少なくとも旅行記を通じて模倣し合い、同時に独自な自己提示を試みてきた動機に社会的カテゴリーが果たした役割を見出すことができる。第二章では移動現象の歴史において、移動経路の情報依存性と社会的カテゴリーが果たす役割を論じた。移民現象が、移民たちが依拠する情報経路や、職業や出発地域や到達地域などの諸条件に応じた社会的カテゴリーのレベルで多様化するのに対し、1700 年以後のドイツ語圏の旅行文化において、旅行者は規範を共有し、単一の社会的カテゴリーに分類された。またこの点で、この旅行文化は 19 世紀半ば以降のレジャー型旅行とも区別されることを本論文は指摘している。

第三章では知識の概念を歴史叙述の中心に据える知識史の方法論について、認識的保証に関する現代認識論を参照して検討した。その際この論文では知識の伝達や移動という現象に注目し、その

形式を占有形式と取引形式の二つに分類した。前者が実行的な認識的権原に依拠した期待によって知識が移動する規範を意味し、後者は検証を通じた認識的正当化に依拠する期待によって知識が移動する規範を意味する。従って、事実・知識の帰属される人物・その評価者の三つの項の関係を規定する主要な要因としての社会的カテゴリーが知識の移動に及ぼす影響を、占有形式と取引形式の区分を導入して分析することで、知識の移動という歴史現象を叙述することが可能になることを論証した。

第四章では第三章の結論を継ぎ、実際に 18 世紀のテクストに依拠し、有用な知識や記述的知識〔historia〕、秘密や嘘といった旅行文化と密接に関連する認識論的問題に取り組んだ。当時記述的知識の大半は、地理的・時間的制約ゆえに知識の源泉にアクセス困難であり、実際上占有形式に従い、知識の帰属される者と評価者の社会的カテゴリーが知識の移動の条件となっていた。従って記述的知識に関して、その内容の信憑性や確証性に要求される水準は、証拠や証言を提供する人物がどれだけ特権的な経験者であるかに応じて変化し、それ故に嘘や秘密が許容されることすらあった。

旅行記も同様の状況にあり、先行する関連テクストとの比較可能性が十分となるまで虚構との区別は読者公衆の間で十分になされることはなかったと考えられる。それに対し確実な知識を披露する客観的な叙述を旅行記の主要な構成要素とした 1700 年ごろの旅行記は、すでにその頃に特定地域の旅行者が増大し、旅行記や旅行案内の内容は十分検証可能になったことを示唆している。

第二部で分析されるのは、こうした客観的記述から 18 世紀半ば以降に記憶や神話的風景の叙述が個人の経験の中へ導入される旅行記の記述が変化していった過程と、そうした変化の背後にある旅行者が一貫して従ってきた旅行文化の規範である。

第一章では発見旅行の巡礼との模倣関係、さらにはツーリズムの巡礼および発見旅行との模倣関係が論じられる。しかし一方では、巡礼者のあり方や信仰と結びつけて語られる好奇心駆動的な発見旅行が根本的には旅行文化の祖型であるとはいえ、ツーリズムは信仰活動ではなく消費活動の一つであり、貴族社会に共有された慣習や規範に従った作法と知識を旅行者には身につけることが求められていた。旅行記の記述もツーリズムにおいては 18 世紀前半までは客観的記述が専らであり、「一見に値するもの〔Sehenswürdigkeit〕」に関する知識を旅の順序に従って記述して自らの確かな知識、また旅行記の内容が先行する旅行記に重複しないように自らの独自の見解を添えて良き趣味を備えた旅行者として自らを提示していた。

1700 年頃には交通史の観点から郵便馬車の制度や街道の整備によって移動が容易になったために、旅行者に関する政治経済的な言説が増え、その結果良い旅行者と悪い旅行者についての言説が形成され、旅行者という社会的カテゴリーとそれに応じた規範が形成されていった。第二章では、その過程を論じた。その際、旅行手引〔Apodemik〕、旅行案内〔Reiseführer〕、旅行の模様を示す旅行記以外に、作法書やカタログ、旅行禁令に関する当時のテクストを参照した。そこでは政治経済的なイデオロギーを前提に、貴族や富裕市民の子息たちが大半を占める旅行者に対し、言語や趣味、倫理的な洗練が旅行によって堕落することなく、国家に有益な見識を獲得することが求められた。

第三章では、実際に学殖者によるイタリア旅行の旅行記や科学者による中南米旅行の旅行記に依拠し、第一章と第二章で明らかにしたことに基づき、旅行記に記された旅行者としての社交規範や

叙述様式がどのように現れていたかを検討した。従来旅行記の通時的研究の多くは、18 世紀半ばでくっきり分類され、修養旅行から市民旅行へ変質したことを前提にしていた。しかし本論文の分析からは、18 世紀を通じて旅行者の間では、貴族社会で要求される所作と、旅行記記述における認識的節約の原理、つまり先行する旅行記に書かれたことは省略して新たな見解を加えることが実践され、旅行記の叙述様式が、客観的記述から次第に内省的に記憶や神話的風景の叙述へ変化したのは、むしろ旅行者としての同一の規範が持続的に 19 世紀初頭の科学者の研究旅行に至っても共有されていたために生じたのだということが明らかになった。故に、貴族的な修養旅行と市民旅行という旅行者という社会的カテゴリーの断裂は必ずしも旅行文化の実際に即さず、貴族的な修養旅行で確立したツーリズムの規範が一世紀の間維持されていたと考えるべきなのである。

さらに第四章では再度旅行記の認識論的な問題に、コレクション文化に関する議論からアプローチを試みた。1700 年頃には貴族の間の経済的・学問的活動であったコレクションは、百科全書的かつ客観的な叙述をもっぱらとする修養旅行の旅行記と共時的にパラレルな文化現象と考えられる。貴族の物品そのものをコレクションしたのはルネサンス的な知的体系に依拠した論証を直観的に実践する目的であり、それと同時に一人の学殖者としての優れた技倆や威信を示すことができた。他方、1800 年頃の市民も蔵書作りに熱心であり、旅行記叢書や地理学叢書、自然学関連の図書が盛んに売れた。こうして彼らが書物を通じて他者の証言や自然物や自然景観の図版を収集したのは教養を確かにするためであった。しかし他者の証言が教養たりうる知識としての地位を得るのは、旅行記や地理学、自然学の知識が旅行者や出版物の増大に伴い十分に検証されうるほどのデータが収集可能になると同時に、加えて比較的新しい旅行記が記憶や神話的風景を物語るためにレトリックの優れた使用を通じ文芸化されることによってであった。従って 1800 年頃の市民文化としての証言のメタコレクションは、モード雑誌や贅沢品のカタログを収集するのと同様の美的な楽しみを伴っており、蔵書へのアクセスは決まった水準の愛好家に限って開かれるのであり、旅行文化において貴族社会の慣習や規範が維持されていたのと同様に、コレクション文化においても貴族の実践が模倣されていた。ただし市民的なコレクション文化は、カタログや他者の経験の集積をコレクションするメタコレクションに特徴づけられていた点で相違していたと考えられる。

第二部ではこのようにして移動の歴史と知識の歴史の双方の観点から、1700 年頃確立した旅行文化を分析した。実際に 18 世紀の旅行記や旅行に関連するテクストを紐解くことで、巡礼から発見旅行を経てツーリズムの発展に至るまで部分的な模倣と変化が継続し、旅行文化が成立する際に「一見に値するもの」を訪れ、目にしたものについて客観的記述を行うという、旅行文化の基礎的な要素が用意されたこと、そして 18 世紀を通じて旅行文化内部において貴族的な慣習や規範に即した行為や知識が共有・模倣され、また旅行記において認識論的節約の原理が一貫することで叙述様式が変化したことが明らかにされた。

以上、本論文は第一部・第二部を通じて、文化の歴史変化における模倣や規範性についての理論的な考察と、その考察に依拠する歴史分析を実践し、旅行文化が初期近代のドイツ語圏で成立した過程や旅行記の歴史変化の原理を明らかにすることができた。